セントラルケンタッキー日本人補習校　　令和５年（2023）９月９日

ＣＫＪＳだより

第 59 号

校長　松平　昭二

shoji_matsudaira@hotmail.co.jp

自分を知る

子どもはいつも、「なぜこれを勉強しなければならないの」と問いかけます。この問いに、親や教師は「将来、必要だから」「勉強しないと将来困るから」と、「将来」を引き合いに説得しようとします。しかし、子どもの問いは、将来ではなく「今」にあります。誰も、今、なぜ勉強しなければならないのかを答えてはくれません。

親や教師の答える「将来」の中味をもう一歩踏み込んで解析すると、こうです。「今、辛くても頑張って勉強すれば、将来、なりたいものに何でもなれるんだよ。だから、頑張りなさい」

「何にでもなれる」が味噌です。将来、何にでもなれるために勉強するのであったならば、その学びの過程から「自己の発見」は消えてしまいます。およそ、「個性」など考える必要はありません。何にでもなれるのだから、自分がどうあるべきか、自分の個性はどこにあるかなど、考えるだけ無駄というものです。

「何にでもなれる」という子どもへの説得の論理、学びのねらいが、今、大きく崩れつつあります。高校中退や大学中退、転職、フリーター、ニートの増加は、「何にでもなれる」という論理のいいかげんさを露呈し、遅まきながら「自分探し」を始めた姿に他ならないからです。それとも窓際で、「こんなはずじゃなかった」と、ジーッと我慢するかです。

さらに、子どもの「なぜ」に答えられない時、子どもは登校を拒否し、学習自体を拒否し、放棄してしまいます。なぜ、知らないことを知る喜び、できなかったことができる喜びを味わうことができないのでしょうか。なぜ、学びは苦行であり、我慢しなければならないものなのでしょうか。

「君のいいところはここにある。こういうところを伸ばせばいい。こんなことをしっかり勉強したらどうだろう」と、「よさ」を伸ばし、それを生かす将来を方向づけていくところに、学習のねらいを求め、支援していくことが求められてきました。

どんなに頑張っても何にでもなれるわけではありません。それはある面で不幸です。「自分にはこれしかない」「これは自分には無理だ」と、「自分探し」「自分づくり」を子どもに目指させ、それを支援していくのが、個性教育の核心となってきています。

本日（9/9）は小学部１～3 年の保護者を対象にした家庭教育学級です（テーマ「あなたは子どもを本当に理解していますか～子どもと親のかかわり方～」）。
来週（9/16）は小学部 4～6 年です（テーマ「子どものやる気を引き出すためには」）。
参加される方は **13 時 45 分までに図書室**にお越しください。